西宮市

積木遊び・WAKU 積木を使って
～つながるかたち・つながるこころ～

発表者：すずらん幼稚園
浅　　純佳　　羽藤　唯衣里　　田邉　野愛
田中　葵衣　　松本　祥子

1. はじめに

すずらん幼稚園は、1930 年（昭和 5 年）西宮市甲風園の地に開園し、今年で 96 周年を迎える。創立以来、日本キリスト教会西宮中央教会の附属幼稚園として、一貫して神の愛に基づくキリスト教保育を行ってきた。保育の中では自由活動の時間を大切にしており、子どもたちが意欲を持って自発的に遊びを選びとり、豊かに自分を表現し、友だちとのつながりの中で主体的に考え、自ら動く力が育つことを願って保育を行っている。

2. 研究目的・設定理由

子どもたちが日々の遊びを繰り広げる中で、一人ひとりの思いを形にし、友達とイメージを共有し、工夫、発展させながら自分たちの世界を楽しむことができる積木遊びを研究対象とした。本園には和久洋三氏考案の命のぬくもりを感じる白木で作られたシンプルで法則性のある WAKU 積木が豊富に揃っており、子どもたちは楽しんでみたて遊びや構成遊びを展開している。この遊びが子どもたちの育ちにどうつながっていくのか、創造活動、自己表現をすることによって他者との関係を生み出していく様子等を観察し、積木遊びの魅力と奥深さを学び、保育に活かすことを目的とした。

3. WAKU 積木導入のいきさつ

2008 年幼稚園教育要領改訂後、保育内容の模索をする中で、相沢康夫氏によるネフ積木を使った「積木ショー」を見学する機会があった。ネフ積木の色の美しさ、ピタッと収まる秩序感に驚き、保育者一同積木に関心を持った。その後机上で遊ぶ積木として 3 歳児クラスにネフ社のリグノ、スピールを導入。子ども同士で同じ色、同じ形を並べる姿や、共同で積み上げる姿が見られ、積木を媒体にして人間関係が広がるきっかけにもなっており、他にも積木を導入することを検討。種々の積木を検討する中で WAKU 積木のデモンストレーションをしている BB ショップの講座に参加し、積木遊びの奥深さに関心を持ち、導入を決定。子どもたちが十分遊べる量の積木を 2 年かけて購入した。またより創造的に遊べるようにケルンモザイク、ビーズも購入した。　　（導入時の園長から聞き取り）

ネフ　スピール

リグノ

ケルンモザイク

WAKU 積木
（WAKU-BLOCK45 セットの内、すずらん幼稚園で使用しているもの）

4. WAKU 積木の特徴

3ｃｍを基本寸法（基尺）にして 0.25 倍、0.5 倍、1.5 倍、2 倍、3 倍、4 倍... と作られていて、いくつかの部品を積み重ねると、必ず同じ高さや長さや体積が作れるようになっている。また小型を 3ｃｍ、中型を 4.5ｃｍ、大型を 6ｃｍの基本寸法にしてその最大公約数を１５とし、1.5ｃｍの積木があればいつでも高さ、長さを一致できるように作られており、子どもが遊びの中で、数量秩序を直感し、創造活動を展開できるように考えられている。単純なフォルム、単純な秩序を持った積木が多様な表現を可能にしている。種類に応じた箱も積木と整合性のある大きさと立方体で積木と共に遊べる寸法に作られている。すずらん幼稚園には、4.5ｃｍの立方体を基本に 2 倍 3 倍の直方体、それらの 2 分の 1、4 分の 1 の大きさ、円柱や三角柱等々、12 種類の形がそれぞれの箱に詰められたものが 52 箱ある。5 歳児、4 歳児クラスに WAKU 積木各種、ケルンブロック、童具のビーズ、3 歳児クラスには WAKU 積木以外の 4ｃｍの立方体の積木とレンガブロックを導入している。

＊本研究では和久洋三氏考案の積木を「WAKU 積木」と表記する。商品名は WAKU-BLOCK

5. 考案者　和久洋三氏の想い

WAKU 童具を考案した和久洋三氏には、子どもたちの育ちに深遠な思いがあり、『人は愛と自由を求め、その先に幸福がある。自由を求めることとは、こんな生き方をしたいとの願いに添って生きることであり、この自由を手に入れるための能力として創造力が備わっている。その創造力は試行錯誤することから発揮され、一見無意味に見える時間の積み重ねから導き出されるもの。子ども時代には自由に表現活動ができる場所と時間を提供することが必要である。』との想いからこの創造活動に相応しい童具として、命のぬくもりを感じる白木を材料にシンプルで法則性のある積木を設計された。『子どもたちはこの積木で遊ぶことでイメージを無限に広げ、集中力、注意力を身につけ、クリエイターとなっていきます。また抽象的なものを具体的な形や量によってイメージすることで論理的に物事を考える力が育ち、この世の中に秩序というものがあることを感じ取っていきます。そして何よりも、楽しく自発的な遊びを堪能することで、自分で決めたことを自分でやり遂げる主体的な子どもに育ちゆきます。』と語られている。

6. 積木遊びの 3 パターン

①みたて遊び＝生活の形式＝愛を求める世界・哲学・宗教＝共生意識の育成

愛は毎日の生活の中で様々な人や物や自然と触れ合い、共感することによって芽生え育まれる。
その対象を思い描く、みたて遊び、ごっこ遊びは人や物を愛する心情、社会や自然との調和、人類の幸福や平和について思考することへつながる。

②パターン遊び＝美の形式＝美を求める世界・芸術＝美意識の育成

同じ形の積木がたくさんあると、子どもは無意識のうちに線対称や点対称の模様を作り出し、
建築的に美しい構成物も表現するようになる。

③探求認識活動＝認識の形式＝心理を求める世界・科学＝探求心の育成

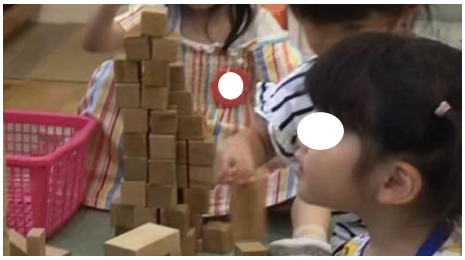
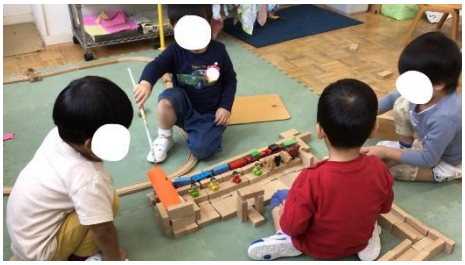
みたて遊びやパターン遊びをする中で、秩序や因果関係を認識し、探求心や論理的思考を使い育てることになる。

7. 各学年の様子

3歳児・ねらい

・全員が積木に触れ、遊びながら自分を表現する。

・積み上げることや並べること、見立てることに楽しさを感じる。

	子どもの姿	保育者の援助	考察
1学期 2学期	・積木よりも興味のある玩具で遊んでいる。 ・保育者と一緒に積木を積み上げて遊ぶ姿が見られる。  ・積木を携帯電話に見立てて保育者や友達と話したり、マイクとしてクラスの友達にアナウンスしたりして遊んでいる。 ・積木を食べ物に見立てて買い物したり、食べたりして友達と楽しむ様子が見られる。 ・自由活動時にはままごとコーナーで積木を用いて料理をしたり、ピクニックごっこを行ったりしている。 ・積木を線路の横に並べて駅を作ること、家や動物園、駐車場などを友達と一緒に作ることを楽しんでいる。  ・マンションや立体駐車場を作り、壊れないように工夫しながら作っている。また壊れたら「こうしたら壊れないよ」とアドバイスをする姿が見られる。 ・WAKU 積木が足りず、元から保育室にある積木も足して遊ぶ姿が見られる。 ・4 ㎝基尺の直方体の積木(レンガブロック)を多く使っている。	・積木に少しでも興味が出るように保育者が自由活動中、積木遊びに誘いかけ、共に積木を出しておくなど環境構成を整えた。 ・保育者が積木を使ってみたて遊びを行い、子どもたちが全体の活動で積木に触れる機会を作った。 ・集団遊びの中で積木のみたて遊びを取り入れ、自由に表現出来るようにした。 ・家にはどんなものがあるかなど会話を広げ、子どもの想像が膨らむような言葉掛けを行った。 ・子どもが自分で考えながら行っていたため、見守った。 ・子どもの表現する幅が狭まらないように自由に積木を使えるようにした。	・初めての園生活に慣れない子が多く、家庭において、慣れ親しんできた玩具で遊んでいたのだと考えられる。 ・最初はやりたい子だけだったが楽しんでいる友達を見て、次第に興味を持つ子どもが増えたと感じた。 ・集団で触れる機会を作ったことにより、今まであまり遊んでいなかった子どもが面白さに気づき、自分の好きな遊びに取り入れて遊んだのだと考えられる。 ・保育者の言葉を聞き、より作りたいものが子どもの中で増えているように感じた。 ・平面から様々な向きで積み上げるようになり、遊びながら物のバランス感覚を学んでいると思われる。 ・WAKU 積木(48 個×2箱)が足りておらず、基尺の違う積木を使うことになったため、もう1箱を用意しておくべきだった。

4歳児・ねらい

・様々な形や図形に出会い表現する楽しさを感じる。

・友だちとコミュニケーションを取りながら遊びを進める楽しさを味わう。

	子どもの姿	保育者の援助	考察
1学期	・進級当初は気の合った男児 7〜8 人で遊ぶ姿が多く見られる。 ・平面の作品を作り、動物のフィギアや車を使用し街などに見立てて遊んでいる。(直方体２〜３箱使用) ・立体の作品に変化し、会話をしながら作っている。(直方体３〜４箱使用) ・直方体積木(レンガ)を主に使い作品を作っている。	・他児を誘おうとするも迎え入れるのが難しい様子が見られ、様子を見ることにした。	・積木遊びを通して仲の良い友達との安心できる場所を作っているように感じる。 ・イメージを形にしやすいのが平面の作品のようである。 ・毎日継続して遊ぶことで様々な形に出会ったり、言葉を掛け合うことで表現力が広がり、それを形にしてみることを楽しんでいる。
2学期	・保育者の助言を聴き、立方体の積木を積極的に使うようになっている。 ・作品が崩れにくくするために土台に立方体積木を使用している。(数や量) ・最初は自分だけでしようとし、意見がぶつかり合う。繰り返し遊ぶ中で互いに意見を言い合い協力して完成する達成感を感じている。 ・自由活動の中で今までとは違う友達が遊びに入ってきても迎え入れ、共に遊ぶ姿が見られる。	・直方体の積木が足りなくなり２箱増やす。 ・直方体１個と立方体２個の高さが同じということということを伝える。また、面積についても触れることで確かめ合った。 ・グループ活動で８つの積木を使用し、見本と同じ形を協力して作る遊びを取り入れる。	・試行錯誤しながら立方体を使い、ぴたっと他の積木と合う気持ち良さを感じている。 ・崩れにくくするにはどうしたらよいかと考え、積木の面積に注目し、意図的に立方体積木を土台に使っている。 ・ゲームを通して様々な形に出会い、同じものを表現するための展開を自然と考えている。また、法則性にも気付いていっている。 ・グループ活動を通して様々な友達と遊ぶ楽しさや遊びが広がる楽しさを感じ始めている。

5歳児・ねらい

・積木一つひとつの性質に気付き、組み合わせて表現する楽しさや達成感を味わう。

・友達と共に遊ぶことを楽しむ中で、自分の思いを言葉で表現していく。

	子どもの姿	保育者の援助	考察
1学期	・沢山の積木があることを喜んで遊んでいる。 	・一つひとつの形の積木に慣れ親しめるよう直方体、立方体、三角、円柱、板それぞれ3箱ずつ出した。	・年長組になり新たに積木の形が増えたことで表現できるものが広がっているように感じる。
	・友達と共に、様々な形の積み木を用いて大きな作品を作っている。 	・保育者も共に遊び、工夫していることを認めたり、完成した喜びに共感する。	・遊びの中で自然と、それぞれの積木の形の対比に気付き合わさる事の面白さを感じているように思う。
	・友達が作った作品の写真を見て、より工夫して作品を作るようになった。 	・作品が出来る度に写真を撮って積木ノートを作った。	・積木ノートを通して、友達の作品に興味を持つようになったり、写真に撮って残す事で達成感を感じているように思う。
2学期	・遊びを進めるなかで、友達が使っている積木を無断で取っている事があった。その反面、使いたい思いを我慢をしている子もいた。	・それぞれが自分の思いを言葉にして表現できるよう、間に入り援助した。	・積木遊びを楽しむ中で、友達とコミュニケーションを取る大切さを学んでいる。
	・種類が増えたことによって、複雑な並べ方をしたり、大きな作品を作るようになった。 	・様々な形の積木を存分に使う姿が見られたので、全種類の積木を出した。	・新しい組み合わせで作品を作る楽しさを感じるなかで、積木が合わさる気持ち良さを感じている。

8. 研修を受けて

（2025.1.9 積木遊び研修会 講師:わくわく創造アトリエ神戸岡本プレイルーム代表　柏木直子氏）

積木遊びを通じてどんな力が育つか

・「まとめる力」手触りなどの感覚、バランス感覚、数と量の原体験、表現力、社会性や協調性など多くの力が育まれる中で、特に基尺のあるWAKU積木はピタッと一致する快の感覚を自分の手の中で感じながらピースとピースの関係性を見つけて関係づけよう、何かを作り出そうと脳神経が働き、ピースを試行錯誤しながらまとめていく力が育っていく。またこのことを通して積木以外にも情報と情報を関係づける力が育つ。

・「応用する力」シンプルな形を色々なものに見立てることは、身の回りのものへの愛情を深めることにつながり、何かに見立てたり何かを作ろうと、小さな選択、決定を積み重ねて作品が出来上がっていく。その作品は何よりもその子ども自身を表している。自分の意志決定で創り上げる力が創造力であり、そこにはまず表現できた喜びが伴う。それによって自己肯定感や集中力が後々養われてくる。

指導上の工夫や配慮について

・最初に子どもたちにWAKU積木を与える時、積木で人を叩いたり、投げたりしないように、積木とお友だちになれるような導入を心掛ける。例えば一人ひとりに一つの積木を与え、その感触を味わったり、木の匂いを嗅いだり木目を観察したり、気温や湿度によって質感が変化することで木は生きていることの実感や、落としてしまえば積木も痛がっているなど擬人化することで、積木に愛情を感じて遊ぶことができるように導入する。また1個の立方体を使って、様々な動かし方をしながらストーリーを語りデモンストレーションすることで、積木に生命や愛着を感じるようにする。

・フレーベルの第三恩物8個の立方体を与え、8個で大きな立方体を作ったり2分割4分割等、積んだり並べたり、またストーリーを作りながら遊ぶことで全体と部分の関係に意識が向かうように導く。

・個人で遊ぶ場合：机の上や積木収納箱等、安定して積木を置ける場所を確保すること。必要な材料を選んで手元に置けるように環境設定をする。個人の作品が他児の作品とつながっていくような言葉かけをし、子ども同士の積木を媒体にしたつながりを深めていく。

・集団遊びの場合：自発的なテーマ決め、あるいはテーマを提案することで、イメージを一致させて取り組むことができるようにする。床で作る大きな作品は動かせないので場所や壊さないための環境設定、材料としての積木の置き場所、動線など配慮する。製作中も場所を広げたり、材料を整えたりすることで子どもたちが集中力を持って試行錯誤し想像力を発揮できるよう配慮する。また時間的には片付けまで入れて2時間ほどの時間を確保し、翌日に続きをする場合は壊れないための対策をする。

・子どもたちが創造力を発揮できるよう、命令、干渉、管理を最小限にとどめ、時間のつながり、友だちとのつながりが保障され、多様な発想が生み出される環境を提供する。

積木遊び・実践

講義の後、保育者で実際に積木で遊んでみた。まずは個人作品を収納箱を台にして動物をテーマに作った。その後動物園となるように作品と作品をつなげていく道作りなどをした。次はグループごとに、大きく動物を作った。動物の脚の部分をまず大きく作り、板を渡すことで胴体を積み上げるという講師の提案を受けて高さや体積の大きい動物に仕上げていった。動物の顔やしっぽの作り方には工夫が必要であり、丸みを与えたり、バランスをとったりするのにも試行錯誤が必要だった。子どもたちが自分のイメージを作り上げている時の脳の中や心情に心を寄せる体験となり、どうアドバイスしたらよいかを学ぶことができた。

9．研究発表まとめ

WAKU 積木を導入して 15 年ほどになる。導入時の保育者はほぼ退職し、現職の保育者はその時のいきさつや想いを知らずに、ただ子どもたちが大好きな積木遊びであることは認識していた。子どもたちをこんなに夢中にさせる WAKU 積木を研究対象としたいという保育者の総意で、この度研究に取り組むことができた。和久洋三氏の「遊びの創造共育法」1 巻～7 巻　（玉川大学出版部）から学んだり、積木遊びの導入や展開の DVD の視聴を行った。そのうえで 2 学期より各クラスで年齢に合った取り組みを研究という意識づけのもとスタートさせ、記録を取っていった。3 学期初めにはわくわく創造アトリエの柏木直子氏に来ていただき、園内研修を行った。WAKU 積木を媒体として様々な形の構成が展開する様子や子どもたちの人間関係が広がっていく様子を見て、「遊びの創造共育法」のサブタイトルとも云える、「つながるかたち　つながるこころ　つながるいのち」から、本研究のテーマを「積木遊び～つながるかたち・つながるこころ～WAKU 積木を使って」とさせていただいた。

3 歳児は 2 学期より WAKU 積木を導入した。まず一斉に積木に触れる機会を持ち、その後自由活動でも興味を持ってみたて遊びをするようになった。最初は同じ形を積み上げていたのが次第に様々な形を組み合わせて楽しむようになった。更に想像力を広げ友達と関係を作りつつ、みたて遊びが発展するよう導きたい。4 歳児は進級当初から WAKU 積木に馴染んでおり、友達とイメージや遊びが広がる楽しさを共有しつつも思いを伝えあう難しさを感じているようだ。みんなで達成感が味わえるように、また積み方などのスキルもアドバイスしていきたい。5 歳児クラスには数、種類とも一番多くの積木があり、それぞれの形をうまく扱いながら意欲的に楽しんで積木遊びに取り組んでいる。作品を写真にし積木ノートも作った。思いやりの言葉をかけながら協力して作品作りをする子どもたちがクラスみんなで大作を作れるよう援助していきたい。

すずらん幼稚園の保育は自由保育を基本としているが自由保育だから保育者も子どもたちも好き勝手にしてよいというものではない。遊びの中にもルールがあったり、画家や音楽家にとってのキャンバスや五線譜、俳句の語数、文法、法律等、人間は枠、秩序によって自由や自由な表現を保障されている。そういったことを理解したうえで自由保育や自由に育てることの意味を考えなければ、ほったらかし保育や放任教育に陥ってしまう。子どもたちは積木遊びをする中で秩序を発見することもあるし、設定されたテーマや場所という秩序の中から自由に表現活動を行っていくこともある。WAKU 積木が自然物と違い、基尺という秩序、法則性に徹底的にこだわって作られていることが、子どもの創造力を養う玩具、ツールとして大きな役割を担っていることを今回の研究を通して学ぶことができた。和久洋三氏が唱える、自由と秩序を保育にも意識して取り込み、望ましい自由保育の在り方を模索していきたい。

和久氏の深淵な想いに基づく WAKU 積木を使った創造活動から子どもたちが、人間の本質、宇宙の秩序を感じ取っていのちの本質に気づいてくれるまでにはまだまだ時間の流れが必要であろうと思うがそのベースとなる感性、感覚が育つ時期を子どもたちは幼稚園で過ごす。卒園児の現在の様子を聞く機会があったが『自分のやりたいことを自分でよしとして、進む力、人と比べず、自分が表現したいことを自分で認めて進む力が WAKU 積木を使っての自発的で満たされた表現活動の体験によって培われたと思う』という嬉しい報告をもらい、WAKU 積木導入時の保育者の願いが成就していることを感慨深く思った。幼稚園という場が今後も子どもたちの自発的な遊びを充分に保障できる時と場を提供し、じっくりと遊びに取り組むことを通して表現活動を豊かに、また自己表現することによって他者との関係を生み出し、作り出し、関係を深めていくことができる創造の場となるように、これからも子どもの育ちに相応しい環境を整えていきたいと思う。